

Looking back 2021

Month	開催された主な展覧会	汎美の活動 / 時事ニュース
Jan.	2020.11.14—2021.2.14 東京都現代美術館 石岡瑛子 血が、汗が、涙がデザインできるか 1.23—4.11 京都市京セラ美術館 平成美術：うたかたと瓦礫 (デブリ) 1989-2019	1.16 大学入学共通テスト 初実施
Feb.		2.17 新型コロナワクチン接種開始
Mar.	3.20—6.22 東京都現代美術館 ▶マーク・マンダース —マーク・マンダースの不在 ▶ライゾマティクス_マルチプレックス	2021汎美展 中止 汎美便り vol.42 発行
Apr.	4.6—6.20 京都国立近代美術館 / 8.7—10.17 水戸芸術館 ビビロッティ・リスト: Your Eye Is My Island —あなたの眼はわたしの島— 4.22—9.26 森美術館 アナザーエナジー展: 挑戦しつづけるカー世界の女性アーティスト16人	4.11 松山英樹 マスターズ優勝 4.15 汎美WEB展2021 公開 (YouTubeほか)
May		5.16 汎美 2021年度定期総会 (リモート開催)
June	6.29—9.23 国立国際美術館 / 11.13—2022.2.23 東京都現代美術館 Viva Video! 久保田成子展	6.6 笹生優花 全米女子OP優勝
July	7.1—9.5 都内各所 バビリオン・トウキョウ2021 7.17—10.17 東京都現代美術館 GENKYO 横尾忠則 原郷から幻境へ、そして現況は? 7.22—10.9 東京都美術館 Walls & Bridges 世界にふれる、世界を生きる	7.3 熱海で土石流被害 7.23—8.8/8.24—9.5 東京オリンピック・パラリンピック 開催
Aug.		8.29 汎美 臨時総会 (リモート開催)
Sept.	9.16—2022.1.16 ワタリウム 梅津庸一展 ポリネーター 9.18—2022.3.30 ポーラ美術館 ロニ・ホーン: 水の中にあなたを見るとき、あなたの中に水を感じる?	9.28—10.5 2021汎美秋季展 開催 9.29 自民総裁に岸田氏 首相就任へ
Oct.	10.2—2022.1.10 アーティゾン美術館 ジャム・セッション 石橋財団コレクション×森村泰昌 M式「海の幸」—森村泰昌 ワタシガタリの神話 10.23—2022.1.23 豊田市美術館 ホー・ツーニエン 百鬼夜行	10.26 眞子さま 小室圭さん 結婚 10.31 衆院選 投票開票 自民安定多数
Nov.	11.3—2022.2.20 八戸市美術館 開館記念 ギフト、ギフト、 11.20—2022.2.23 東京都現代美術館 ▶クリスチャン・マークレー トランスレーティング [翻訳する] ▶ユージーン・スタジオ 新しい海	11.18 大谷翔平 ア・リーグMVP受賞
Dec.	12.18—2022.2.27 府中市美術館 池内晶子 あるいは、地のちからをあつめて	12.4 汎美 運営委員会 (リモート開催)

編集後記

編集委員

大辻 敏成 / 企画・編集長
三竹 康子 / 企画・渉外
渋谷 淳一郎 / 企画・データ化
木虎 和生 / 企画・デザイン

今回お届けするのは、冊子リニューアル第1弾! サイズをA4からB5に、本文モノクロから全頁カラー印刷にバージョンアップ。特集テーマには、編集部からの依頼に対し様々な文章をお寄せ頂きました。この場を借りて改めて御礼申し上げます。

また編集部では、ご助力頂ける新たなメンバーを募集致します。編集部参加のほか持ち込み企画・新規投稿なども含め、少しでもご興味のある方は是非! (K)

HANBI LETTER 汎美便り vol.43

発行 2022年3月

[汎美術協会 事務局] 〒168-0074 杉並区上高井戸 2-4-10 大野善孝方
Eメール jimukyoku@hanbi.jp

汎美便り
RENEWAL!

HANBI
LETTER
vol. 43

表現者たちの
紡ぎ出す言葉—
それが汎美便り
汎美術協会 会報

特集

私にとっての
特別な作品・作家

発行 / 2022年3月 汎美術協会 事務局

01 特集 | 私にとっての特別な作品・作家

- 02** 師と私 (抜粋) 愚聴風 = 大辻 敏成
- 04** 重ねて行く日々 岩田 洋子
- 05** 私の好きな作家 三井 雅彦
- 06** 普遍性を獲得した文学と美術
フランクフルト『夜と霧』と香月泰男『シベリア』 中西 祥司
- 07** 私が感銘を受けた一作
ファン・ゴッホ・フィンセント『ひまわり』 関根 昌之
- 08** 今までに見たこともない絵 小川 猛志
- 09** 初めて見た西洋絵画 高木 須美
- 10** 自分の心で決めるもの 佐川 毅彦
- 10** 或る画家の思い出 木虎 和生

E s s a y & R e p o r t i n g

- 12** 芸術喧嘩 成田 雄智
- 14** 汎美の理念と臨床美術
シェアアートプログラム『雪降る街』 北澤 晃
- 16** こんなんで暮らしたい 佐藤 聖子

裏表紙 Looking back 2021 編集部

特集

私にとっての
特別な作品・作家

本特集のテーマ設定について

皆さんの創作表現の中での、さまざまな出会いや感銘、その作品や制作者など、また表現者としての出自譚等々の思いを共有したり、心情の裡を見つめてみたい…そんなことから編集部では、本特集を考えてみました。

ここに紡がれた言葉の数々を、じっくりと味わうようにお読み頂けましたら、幸いです。

※お寄せ頂いた元の原稿から、編集の都合ならびに読みやすさの観点で、タイトル追加や改行/字下げなど、文意を損なわないレベルでの調整をしております。ご了承下さい。

汎美便り 編集部

師と私 (抜粋) ※「汎美便り-30号」の寄稿より、一部を引用。

愚聴風 = 大辻 敏成

私は元々対人恐怖症で自己嫌悪も強く、己の過去を検証することなどは大の苦手、従って読書子の望まれるような師弟関係の美学などは不幸にして持ち合わせていない。まして私の貧しい画人生上での師たるや、不遜と言われても仕方ないが、とりたてて通俗の域を出るものではなかった。

ところが私にとって師に匹敵するような人物が皆無という訳ではない。そのような友人が二人いるので、ここでそのうちの一人について述べてみたい。

* * *

都立N高校・美術部で出会った一年先輩の遊佐滋がその一人である。当時はインテリの登竜門とさえ思われたT.B.(肺結核)を患い、一年を休学して私と同学年になったのだが、芸術の西も東も分からない少年にとって

彼は、丁度ヘルマン・ヘッセの「デーミアン」の如き存在で、私にさまざまな刺激を与え引っ張っていった。絵や音楽を通し人生上の、芸術上の実存的態度や志向を触発してくれたのだ。また人間としての青春の友情という至宝を贈られたのである。その友情の思い出たるや、昏い私の青春に点る灯として未だ尽きることを知らない。その一つに触れてみよう。

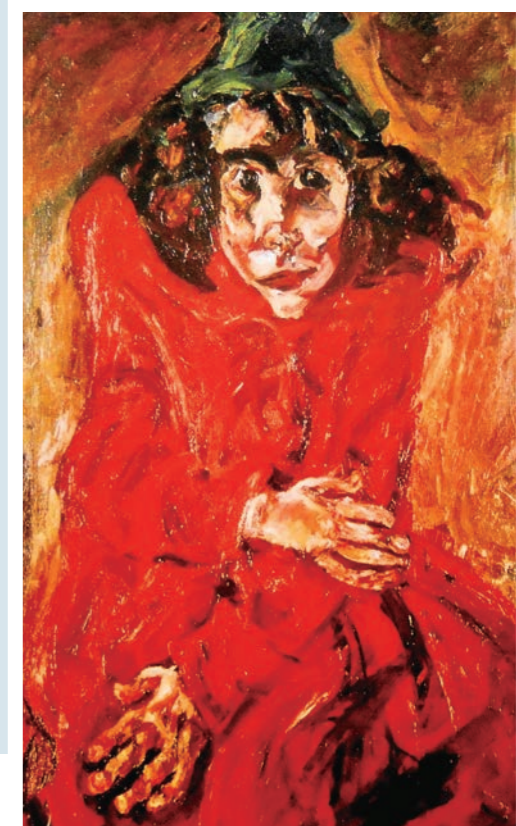
土曜日の放課後など、私たちは京橋の「ブリヂストン美術館」へ脚を運んだモノである。絵と音楽が目的だったが、音楽はささやかなレコードコンサートだった。この美術館では毎回シルクハットのおじさんの絵に迎えられたが、このマネの絵には意気消沈し、心情の騒ぐものではなかった。しかしゼンヌヤル



ハイム・スーチン
『風の強い日』(1939年)

こんな訳でスーチンとの出会いは鮮烈であり、上手に説明的に描くのが絵だ…とされている青年への衝撃の鉄槌だったのである。「表現」というものの濫觴^{*3}とも言えるだろう。

八十路の現在でも「狂女」や「シェーンベルク」に出会うと“嗚呼、去りにしわが青春よ”とさんざめく光とともに血が騒ぐのである。



ハイム・スーチン 『狂女』(1920年)
西洋美術館蔵(当時はブリヂストン美術館蔵)

オーの絵も並んでいて、とりわけハイム・スーチン^{*1}の「狂女」には心情を掻きむしられるような凄みがあった。

別室でのレコードコンサートは後に名の出る音楽評論の柴田南雄氏や新日フィルの指揮者・渡辺暁雄氏(当時は長身だがガリガリのやせっぽち)などの解説で、初めて聴く近現代の音楽もあった。ドビュッシーまではよいが、ウィーン世紀末のシェーンベルク^{*2}になると「何だこれは?」と無調音楽に初めて接する驚きがあった。「月に憑かれたピエロ」は、私にとってはスーチンの「狂女」だったのだ。また私たちがアヴァンギャルドに出会った最初と言えるだろう。

遊佐とはかく言う驚きや初めての物事を共にしていつも一緒だったのである。遊佐はやがてG大学・芸術学部へ進学、G・ルカーチのマルクス主義美学に接近、理性の破壊へと誘われた。そのころから私とは距離が隔てられてゆき、惜しくも五十代前半にして鬼籍に入ってしまった。彼は将に自己破滅的な男であった。

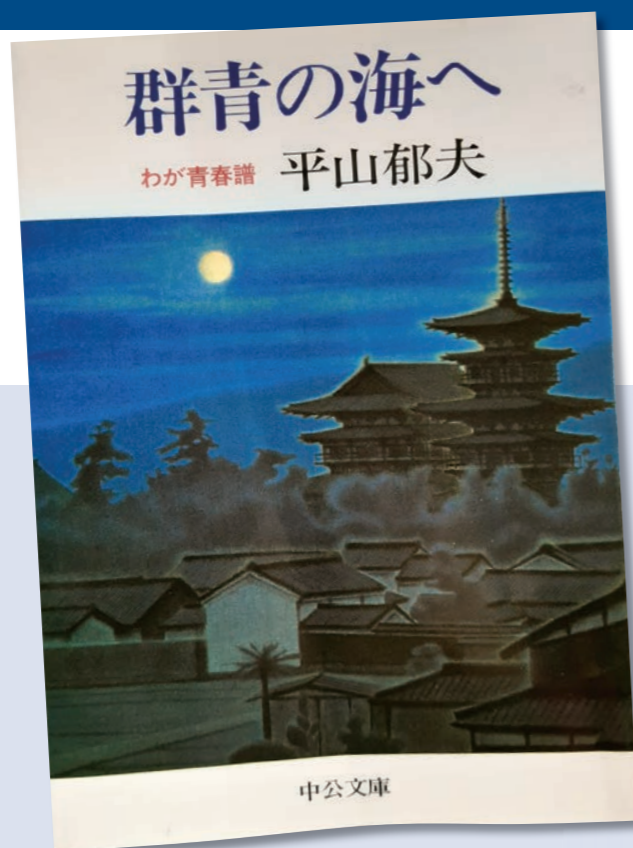
* * *

注 記

- *1 **ハイム・スーチン** Chaim Soutine 1894-1943 リトアニアに生まれ、19歳でパリへ赴きエコール・ド・パリ所属。ロートレアモン^{*4}の支援を受けながら内省的な孤高、強烈な色彩表現といった表現主義的画風はなかなか受け入れられなかった。
- *2 **シェーンベルク** オーストリアの19-20世紀の作曲家。音楽は普通「ハ長調」とか「ホ短調」と言った調性があるが、それを外し「無調音楽(12音主義)」を追求した。現代音楽のアヴァンギャルド。
- *3 **濫觴** らんしょう。ものごとの始まり。
- *4 **ロートレアモン** 19-20C 仏の詩人。「マルドロールの唄」で世に出た。とりわけ、シュールリアリズムへ影響を与えた。

重ねて行く日々

岩田 洋子



多分1980年頃だったと思う。新聞の集金の方からたまたま頂いたチケットで「日本秀作美術展」を見に行った。本物の絵画を見るのはモナ・リザ以来か?と言う程縁がなく、しかも現代の有名な作家ばかり。多勢の中で歩きながら鑑賞しつつただ「おー!」と感心していたのだが、青い夜にイスラム寺院が描かれた絵の前で感嘆とは違う不思議な思いが湧いてきた。

その頃の私は、先のことを考えると辛くなるのでとにかく今日だけはしっかりやろう、明日の朝は目が醒めなければいいなあ、と消極的自殺願望ありの日々だった。しかし次々と立派な作品を観るうちに、何故突然そんな気持ちが浮かんだのかよく解らず、それを確かめるためにチケットをもらっては何度か同じ展覧会へ足を運んだ。

それは、何のために生まれてきたのか、このままでいいのか? という自分に対しての問いかけだった。絵とは関係なさそうだけど、ふっと頭に浮かんでしまい、もしかしたら非日常の絵画や彫刻を観ることで答えが見つかるような気がしたのだ。美しい色や形、想像を超えた造形は、現実を小さく感じさせてくれるとともに次第に新しい方角をも教えてくれることとなった。「挫折した気持ちを立て直し自分らしい人生にする」とはっきり自覚したのは10年位後のことで、更にはいつか絵を描きたいと思い始めたのである。

それまでの自分は挑戦をして失敗することが怖く、できる範囲の努力で済ませていたのだが、日常生活の厳しい現実に向かううちに、たとえ困難でもより良い方を選ばざるを得ず、し

かしそれが実を結ぶことによって自信へとつながり、もしかしたら実現するかもしれないと思えるようになりまた支えでもあった。

だいぶ遠回りをしてしまったが、あの時に見た絵と沸き上がった思いとの状況はずっと忘れられない。後に作家の著書で、あの青は生まれ育った海、原風景の色だと知った。長い時

を経て表現された色は、何も知らない者に力を伝えた。私の思いが重なった先にはどんな色や造形が待っているのだろう。体力と気力がいつまで続くのか、ついていけるのか等々、先のことはあまり考えずに、心の声に耳を澄ませ、やはり今日1日を積み重ねることに専念しようと思う。

私の好きな作家

三井 雅彦

私の好きな作家は、篠田桃紅という人です。この方は、画家ではなく書家です。しかも、墨象という「水墨の抽象画」と呼ばれているジャンルの作品をつくります。基本は墨ですが、朱泥や金箔、銀箔なども使います。篠田桃紅は、2021年3月に107歳で亡くなりましたが、2015年に「103歳になってわかったこと」という本を執筆し、45万部を超えるベストセラーになるなど、亡くなる直前まで精力的に創作活動を行っていました。

私がこの作家を知ったのはいつだったか忘れてしまいましたが、東京の「菊池寛実記念智美術館」に展覧会を見に行っただけを覚えています。すてきなレストランの隣に入口があって、地下に降りていくと展示室がありました。展示してあるどの作品もすばらしかったです。どんな筆を使っているのか分かりませんが、細い三日月のような線があり、鋭角に折れ曲がった線があり、真っ直ぐにどこまでも伸びる線があり、あるいは、線と言うより面と言った方がよいような幅の広い線があり、それらの線がともかっこいいのです。

絵画においても線は重要ですが、篠田桃紅の作品は、線だけで構成されているのです。線の美しさはもとより、線だけでこんなに緊張感のある空間をつくれるということに驚きました。考えてみれば、「書」ってそういうものですよ。書を文字だと認識していたときは、うまいか下手かという観点でしか見られませんでした。書は線だと認識すると、美しいと思えるようになりました。そうやって書の作品を見ると、美しい線がたくさん見つかりました。おもしろい形の点がたくさん見つかりました。

そしてあるとき、この線や点の形を自分の絵に使えないかと思ったのです。そこで、その点の形そのものを抽象化し理想化して構成してみたらどうかと考えました。最近の私の作品は、こうした考えから生まれてきました。発想はおもしろいと思ったのですが、なかなかうまくいかないのが現実です。でも、どうしたらかっこいい形や構成ができるだろうかと、あれこれ悩むのが楽しいと、退職して気持ちにゆとりがでたのか、そんな風に思えるようになりました。別にうまくなくたっていいですよ。

普遍性を獲得した文学と美術 フランク『夜と霧』と香月泰男『シベリア』

中西 祥司

ヴィクトール・E・フランクの『夜と霧』。心理学者である著者がアウシュビッツなどの強制収容所での体験を通じて、多くの大衆の「小さな」犠牲や「小さな」死を心理学者として分析し、描写する。強制収容所の日常がごく普通の被収容者一人一人の魂にどのように映ったかを書きつづっている。

その情景が「香月泰男のシベリアシリーズ」に重なる。香月は第2次世界大戦後のシベリア抑留で過酷な体験をし、それをシベリアシリーズとして57点の作品にしている。

例えば、夜と霧の「…<前略>…狭苦しい護送車には、鉄格子のはまった小さなぞき窓がふたつ…<中略>彼らはたいいのぞき窓に押しあいへしあいしていた。私もその中にいた。爪先たち、人々の頭越し…<略>」は、香月の『北へ西へ』がまさにその情景だ。

黒と黄土色の独特の色調で、要素を最大限に絞り込み簡略化した力強い構成だ。貨車の小さな窓の鉄格子にしがみつき、外を凝視する。劣悪な環境、貧しい食べ物でやつれた顔

が鉄格子から覗く。悲惨な明日を想像させる色のない情景だ。

「凍てつく凍土につるはしで穴を掘る」は、亡き友の屍を投げ入れる穴を、つるはしが凍土にはじかれながら振り下ろす。「その穴に友を埋葬する」などと同期するように、香月のシベリアが浮かんできた。

立花隆は香月研究書『シベリア鎮魂歌——香月泰男の世界』で、香月が理不尽で非人道的で過酷だったシベリア抑留をなぜ描こうとしたのかなどなど、聞いている。腹を空かし、看取られることもなく、絶望的な思いの中で死んでいった仲間たち。それは強制収容所で死んでいったユダヤ人にも通じる思いだ。この作品はまさに仲間の無念な死への鎮魂歌だったと私も思う。

香月泰男が苦しみながらも渾身の思いで描いた世界、シベリア抑留、戦争の悲惨さと絶望、理不尽さや非生産性を思うとともに、多くの人々に無念な死、犠牲を強いるのが戦争であり、決して戦争はすべきではないと改めて思う。



『北へ西へ』
私の想いをジカに人々に訴えたい。
記憶に繋がる制作だから夢の中の色と同じで、
あまり多くの色を使えばウソになる

私が感銘を受けた一作 ファン・ゴッホ・フィンセント『ひまわり』

関根 昌之

この絵はオランダのファン・ゴッホ美術館の『ひまわり』です。もちろんゴッホの『ひまわり』はどの絵も大好きです。何枚もありますし、実はどのくらいあるのか私は把握はしていません。ゴッホのそれ以外の絵も『黄色い家(通り)』や『サン=ピエール広場、パリ』『レストランの内部』『草地の木々の幹』『サン=レミの療養院の庭』などなどなどなど、素晴らしいのです。私が言うまでもありませんが。

ゴッホは自殺ではない、と私は思っています。「いきなりそんなこと言われても。」と先輩方(後輩方も)は思うかもしれませんが。それはあの『夜のプロバンスの田舎道』など最後の方に描いた作品を見るとその力強さにそんな気がするのです。(自殺ではないんじゃないかという研究の受け売りも入ってます。)

そんな私が初めて本物のゴッホの『ひまわり』を観たのは、当時安田火災の例の裾が広がっているビルの上の方にある美術館の中で、今から30年くらい前でしょうか。恥ずかしながら少し「ゴッホがナンボのもんじゃい」状態で当時お付き合いしていた女性と一緒にそれを観ました。文字通り腰が抜けてカマドウマのようになり、心臓のバクバクが止まらなくなりました。そして気持ちが少し悪くなって、その日はビルの下にあるベンチでその女性に扇子で扇いでいただきながら(高いところが苦手だったのもありますが、その日東京タワーに行って上上がった時も同じような感じになりました)「ゴッホは只者でない、ゴッホはもしかしたらこの世で一番絵が上手いかもしれない。」と頭の中でずっと考えていました。



その女性とはその何年か後に別れてしまいました。今では良い思い出になっております。

ゴッホは私にとってクリムト、ムンク、モネの上をいく画家になりました。それは大変な事です。何しろ生まれてそれまでクリムト、ムンク、モネがトップ3だったのですが、その上をいくのですから。

それから私は、いろんな国の美術館が収蔵したゴッホの『ひまわり』が日本に来るたびに、観に行つてはあの時の(安田火災の)『ひまわり』と比べて「まあ、カマドウマになるほどではないわな。」なんて思いながら自分の中で世界で一番の画家ゴッホという人の凄まじさにただただひれ伏すのでありました。

今までに見たこともない絵

小川 猛志

私の人生を変えた絵画作品があります。その絵に出合ったのは、高校3年の夏休みも終わりの頃でした。それまでの私は、勉強はしないけれど歴史が好きでしたので、漠然と大学にでも行って社会の先生にでもなるかなあ。と考えていました。

ところが、その絵に出会った瞬間「私は絵を描かねばならない。絵を描くことこそ私の人生だ。」と直感しました。それまでの私は詩を書いていたのですが、絵はほんの数枚描いていたかどうか。なのにはっきりとそう確信したのです。

その絵とは、サマセット・モームの書いた小説「月と6ペンス」の中に出て来るものです。

このお話をご存じの方も多くいらっしゃると思います。主人公はポール・ゴーギャンをモデルに書かれたものですが、当時の私は、彼のことを全く知りませんでした。何年後、ゴーギャン展を見に行く機会がありましたが、少しも心は動きませんでした。むしろ色彩が濁っていて汚いなあと思ったのを覚えています。私の感動した絵はお話の中で、主人公が南海の孤島で最後を過ごした小屋の中に描かれていたものです。その絵は、著者モームをして「今までに見たこともない素晴らしい絵であった。」と言うものです。それは残念なことに燃えてしまい今では誰も見ることはできなと書いてあります。それ故、この絵をここに紹介することはできません。

何故この絵がこの言葉が、私の人生を変えてしまったのでしょうか。それまでの私は、自己顕示欲の固まりでしたが、何一つ自分が認められないと悶々としていました。私の感情はあるときは激しく昂揚し、又あるときは酷く落ち込んで、その振幅の激しさに自分で自分を持て余していたのです。そんな中に出会ったその絵は、静かでピュアでまるでこの世のものとは思われないものに思われました。自分の命を完全に燃焼すれば、誰にも認められなくてもいいと言う世界があることを初めて教えられました。

それから、自画像を多く描きました。冬の山や流れの激しい川、底まで見える澄んだ川。どの様に漢字や文字ができたのかを考える等、いろいろなコンセプトで・方法で絵を描きました。立体作品・彫刻も作ってみました。楽曲も作ってみました。今や空間軸の中に時間軸を入れる舞をやっています。

「今までに見たこともない絵」これこそ私の描くべき絵・オリジナルな作品こそ作家のやるべき仕事だと思っています。誰も描いたことのない・誰も表現したことのない作品を作ることを立ち位置として製作を続けています。

初めて見た西洋絵画

高木 須美



ミレー「晩鐘」

終戦直後の昭和21年、私は家族と共に台湾から引き揚げ小学3年生を福岡市で迎えた。

その頃「金の鈴」（と記憶）という小学校低学年向けの月刊少女雑誌があつて母に買ってもらった。娯楽に乏しいその頃、本は宝物だった。カラフルな表紙をめくった時目に飛び込んだグラビアの絵に釘づけ、見開き全体に二人の男女の農夫がお祈りしていて水平線まで広がる田園風景、遠くに教会らしい建物、いいなあ、これって描いてあるんだ、、農夫の祈る姿が高尚に思えて西洋に憧れた。田園風景も台北育ちの私にとっては楽園のようだ。見飽きず毎日眺めながら次号を心待ちにした。次号が来ました。ワクワクしながらページをめくった。「ガッカリ」でした。それは美しく可愛らしい花嫁姿の少女が描かれたイラストで「花嫁人形」の歌詞が添えられていた。

作者は有名な落谷虹児だったと思うが前号の絵とくらべなぜか興奮めしたのを覚えている。

その時の気持ちのギャップが忘れられず後年友人に話したところ「西洋の絵は写真のようにそっくりに描かれているからわかり易いのよ」との返事、確かに！前者はリアリティあるもの、後者は大正浪漫、一見子供向けのようだけど子供にとってロマンは難解、「雨降のお月」や「カナリヤ」もなぜ童話なのか？私も子供の頃はその内容が不思議で理解出来なかったのを思い出す。リアリティーは子供の心にも入って行く。

現代はイラスト流行りだけど子供にはやはりリアリティーある本物の絵画を観せてあげたいと思う。

心に残る絵、ミレー作、「晩鐘」です。

自分の心で決めるもの

佐川 毅彦

私が感銘を受けた一作、または作家、昔はいたのかもしれないけど、私も年を取り、物忘れがひどくなり、だれも思いつかない。私は今、自分の絵を描くだけで精いっぱい。他人の絵など、どうでもいい。

私は毎日絵を描いている。試コウサクゴしながら、あーでもない、こーでもないと言いつつ線をひいたり色をぬりつけたり、私はそれほど長生きできそうにない。なんとかあと十年ぐらいではないか?と思う。大切な残り少ない人生である。自分の絵に向き合い、なんとか気に入った絵、やった!と思える作品を描くために生きている。人生はみじかいです。漢字も忘れてしまっている。ジ書を開くほどヒマではないのでひらがな中心で書いていきます。

3年ぐらい前に友人の家に酒盛りに呼ばれたその席で、友人の友だち、私は初タイメンの人です。私が絵描きだと知ったのだと思うけど、あのダビンチのモナリザのどこがいいのかと聞いてきた。私もゼンゼン好きではない。そうなのだ。どこのだれが、モナリザがいいと言っているのだ。私は知らん。私たちはとんでもない絵を無理矢理すばらしいと何者かに思わされているのではないだろうか。よく考えてみれば、印象派以前の西洋絵画など、私はほとんど好きではない。

絵の良しあしは自分の心で決めるものです。自分が本当に気に入った絵がケツ作である。

或る画家の思い出

木虎 和生

その人の名前は「山崎 晴男」——母の兄、私にとって伯父にあたる。光風会や日展などに出品する“市井の絵描き”であった。

生涯を独身で過ごし、油絵の制作に打ち込む傍ら小説なども書いていたようだ。けれど作品は売れず、デザインや印刷物の仕事で収入を得ていたらしい。——そんな伯父のことを実のところ私はあまり知らない。早くに大病を患ったのか晩年は入退院を繰り返し、会う機会も少なく、ごく限られた交流しかもてないまま、私が小学三年の時に四十代半ばで

他界してしまった。学校を休んで参列したお葬式では、従兄弟たちに会ってはしゃぐほどまだ私は幼かったが、その厳かな儀式を通してじわりと沈殿するものがあり、生前の佇まいを伝える遺影(細面に黒縁の眼鏡をかけ、ベレー帽を被り左前方を見据えた写真)を“凜とした画家の姿”として心に刻んだ。

* * *

お盆や正月に訪れる母の実家、古めかしい日本家屋の二階に畳敷きの伯父のアトリエは在った。勝手に入ってはいけないと咎められ

つつも、階段を登るごとに漂ってくる油絵の具の独特の匂いに引き寄せられるように、私は主の居ないアトリエに幾度となく忍び込んだ。そこは狭いながらも木製の大きな画架や机・書棚、材料やモチーフとおぼしき瓶類や人形・お面など得体の知れない物がひしめきあう、当時の私にとってのワンダーランド。そんな中で私はぎっしりと詰まった書棚から画集のほか図版の多い「別冊太陽」「文藝春秋デラックス」などの雑誌を慎重に抜き出し、ソファーに座って見ることを楽しみとしていた。もちろん、アトリエには描きためた絵が沢山あったはずだが、さすがに作品に触れることは憚られたのか、部屋の何処かに仕舞われた絵を一人の時に詳しく観たという記憶がない。伯父の作品を展示された状態でしっかりと観ることができたのは亡くなった後、市民ギャラリーで開催された遺作展においてであった。

——おそらくは展覧会への出品作であろう油絵の大作の数々。けれど今思い返すと、それらの画題・内容を殆ど覚えていない。一点だけうっすらと思い出されるのは、在所から程近い姫路城(別名:白鷺城)を、真っ白な背景に白く威風堂々たる形として描き出した、コンクールで受賞したという作品。その画面は平滑ではなく、ペインティングナイフや筆の跡によって堅牢なマチエールを形に与える手法だったと思う。当時の私には理解出来なかったが…。

むしろ惹かれたのはスケッチブックや洋紙に日常の身の周りの品々、人物・動植物などをペンや鉛筆・木炭ほかを使って描いた大量の素描のほうだった。それらはクロッキーもあったが、ほとんどが深い影をつけたデッサン

に近い、例えば鉛筆では寝かせた幅のある薄いタッチを重ね、ペンならクロスハッチングの描法で、特に光に強い関心があったことが窺われる。それまで落書きのようにしか描いていなかった私には鮮烈で、真似をして身の周りの物・人たちを、最初は新聞折り込み広告の裏の白い紙に、後にはスケッチブックを購入して、盛んに描き始めることとなる。

* * *

こうした伯父に関する思い出は、素描の真似をしたというだけではなく、幼い私に決定的な影響を与えたように思う。長じては、より広範な作家・作品との出会いもあり、目指す方向は違ってきたが、その端緒において伯父という存在があったことは間違いない。

惜しむらくは、親族だけで伯父の作品全てを保存するにも限界があり、その多くは処分・散逸してしまったことだ。そんな中、少ないながらも母の手元に残った数点をもらいうけ、そのうちの一枚を、今も私のアトリエの扉を開けてすぐの所に掲げている。



私のアトリエに掲げる一枚
山崎 晴男「無題」/F8号/制作年不詳

芸術喧嘩

成田 雄智

コロナ禍の最中、ライブペイントはできず、展示もできず、バイトもできず、金もなく。その最中、行ったのが芸術喧嘩。

私にとっての芸術は己との楽しい自問自答の喧嘩の末に生じ、結果的に芸術となるものだ。

例えるなら、河原でタイムン(1対1)で殴り合い、勝敗つかずお互いに、「お前なかなかやるな」「お前もな」と背中を地につけながらお互いに笑い合い、最後は握手で終わる、一昔前のドラマのような殴り合い。

自分以外の誰かに何かを伝えたい、そういったものとはかけ離れている。

そこにお前の喧嘩は面白いと言ってくれる、狂いつつも楽しい奴等が加わった。その男は鍛冶師。自分とは違う世界。だが、ウマが合い、彼となら最後に握手のできる喧嘩ができそうだ。

ただ、喧嘩をしようにも殴り合いの喧嘩は怪我をする。怪我をせずともやれるものはあるか。

芸術だ。

せっかく、芸術などと名を呈するのであれば、他人にも見せたほうがいい。とはいえ、コロナ禍。イベントもできぬのであれば、**映像だ。**

ギャラリーに足をよく運んでくれた、幼馴染の作家に「ギャラはないが、遊ぼうぜ」

良いよと、返答してくれた映像作家、鍛冶師を引き連れ、キャ



ンバスの代わりに鉄板を用意し、鍛冶師の住む別荘へ。

一晩、ゲームをしながら、焚き火をして過ごし、次の日の朝、2時間にも及ぶペイント。狂気を糧に狂気を得ながら描く。

喧嘩故に、せっかく綺麗に描いた鍛冶師の線を私が消し、私が描いた絵に鍛冶師が砂を撒き、ガソリンをかけ、燃やし、そこに私が手を突っ込んで描く。プランニングなどない。喧嘩には不要。たぎる自分をぶつけた結果だけが存在する。

ペイント直後にインタビューが行われ、返答を繰り返すが、お互いの気持ちは一つだった。ふざけるなよ。という気持ちと。ありがとうという気持ちの繰り返しの殴り合い。

これを私達は「**芸術喧嘩シリーズ**」とし、私の私達の一つの芸術スタイルとなった。

第二弾は音楽家。第三弾、巫術師。第四弾、書道家。他にも映像作家。パーカッショニスト。様々な喧嘩をお見せすることになるだろう。

芸術は人だ。と私は捉える。

芸術を中心に自分は回らず、自分を中心に芸術はある。

誰かに伝えたいという、高尚さは私にはない。喧嘩をしよう。私の絵を観るのもまた、ひとつの喧嘩だ。

汎美の理念と臨床美術 シェアアートプログラム『雪降る街』

北澤 晃

「汎(広く行き渡らせる)美」という意味の名称に共感し、「汎美展」への出品を会員として続けている。私は、日本臨床美術協会認定の臨床美術士であり、その日常的な仕事とのあいだで、汎美術協会の理念は、自己矛盾を生じさせないからである。それは、どういうことか。

臨床美術は、絵やオブジェなどの作品を楽しみながらつくることによって脳を活性化させ、高齢者の介護予防や認知症の予防・症状改善、働く人のストレス緩和、子どもの感性教育などに効果が期待できる芸術療法である。

臨床美術のセッション(制作)では、最後に必ず鑑賞会を行う。そこでは、臨床美術士が参加者の作品について、その制作プロセスも含む作品の成り立ちの素晴らしさを自身の言葉で伝えていく。臨床美術では、すべての人が対等なアーティストであると考へており、指導的な指摘や批評を挟むことはない。

この在りようは、「権威主義的な階層性や審査制度を否定し、すべての作家は対等の立場に立つべき」とする汎美術協会の理念に相通じるものと思っている。臨床美術士である私にとっては、それはそれ、これはこれと言いつけてしまうことは、自分の生き方の上で、大いなる矛盾となるのである。つまり、臨床美術の場においては権威的な意識を排除し、自身の制作においては権威的なものに位置づけて安住するという精神は、臨床美術士の魂の力、実践力を損なうものである。

さて、私は自身の創出した作品を汎美展に出品するとともに、可能な限り臨床美術の考え方でセッションが実施できるようにプログラム化する。「汎(広く行き渡らせる)美」は、制作した作品を美術館に展示し鑑賞して頂くことに留まらず、その制作をプログラムによってシェアすることによって、美意識は循環していくことになる。このようなことが、私がつくるプログラムを、「シェアアートプログラム」と名付けるとともに、自身を「シェアアーティスト」と称する所以でもある。

以下、シェアアートプログラム『雪降る街』を紹介する。

このプログラムは、雪国で育った私自身が、様々な生活上支障を生じさせたり、自然災害に及んだりする雪に対するネガティブな感情をいったん括弧に入れ、子どもの頃にわくわくした気持ちで眺めたり、温かい場所からしみじみと眺めたりした記憶を想起させて描いた作品をプログラム化したものである。雪景色と言えば、極めて無彩色に



『雪降る街』

近い色で埋め尽くされた作品が多いように思うが、必ずしもそうでもない身体化した記憶が制作プロセスのなかで立ち上がってくる。そうした内的な立ち上がりは、アートシェアによって、人々の心を癒やし、臨床美術の目的を遂行していくことになる。絵なども何十年も描いたことがないとか、絵は下手だから嫌いだと言っておられる方が、生き生きと楽しんで描かれることに立ち会うことは、シェアアーティストとしての至上の喜びである。

ここで、紹介する作品は、このプログラムによるセッションのなかで、私自身がデモンストレーションしつつ、参加者といっしょに描き進めた作品である。つまり、この作品は、私個人に閉じた表現世界ではなく、参加者とのコミュニケーションを通して、いっしょに回想し、循環させ、行為するなかで創出された「こと(出来事)的な世界」であって、思い切つて言えば、他者との協同的な作品であると言える。こうして、私の臨床美術の現場での制作は、他者との相互行為によって成り立つ世界であり、ともすると表現が他者から孤立し、独りよがりになる表現世界を自身の個性と思う状況に陥りがちな傾向を払拭してくれている。

ご覧頂いている作品『雪降る街』は、クリスマスイブに雨が雪へと変わり、寒くなるなかで、それぞれの家では温かな家族の団らんが聞こえてくるように感じている表現世界である。

淡墨が作り出す空気感は、冬の冷たさを自身に感じさせ、そんな冷たさに滲む水彩絵の具の彩りは、人々の暮らしのなかにある温かさを感じさせる。オイルパステルで描き込んだ街並みは、クリスマスイブの華やいだ様子を立ち現している。

これからも、臨床美術の現場で自らの内に他者性を涵養し、自身の表現世界を構築し、汎美展への出品を続けていきたいと考えている。

こんなんで暮らしたい

佐藤 聖子

妊娠と出産の為、汎美展への出品を辞退していた私に今回汎美だよりの文章を書いてほしいと依頼があり、昨今の今の私の想いを綴ることにしました。

私は以前より人がありのままに暮らせる差別のない世界を望む想いがあります。誰もが思うように、自分や自分の周りの大事な人が笑顔で過ごせることが願いです。ですが、今の日本ではマスクをつけること、治験中のワクチンを打つことが義務付けられ、会いたい人には会えず、自然体で人間らしく暮らしていくということが難しくなっている社会に見えます。

去年のはじめに妊娠が分かった際には、かかりつけの市内の病院に立ち合い出産を希望しましたが、それはコロナ禍で出来ないとされました。子どもの出産を夫婦で共有したいという想いが私にはあった為、改めて病院を探す中で、自然に近い形での出産を大切にしている助産院を見つけ、私たちの想いを受け入れてもらえました。「お母さんの気持ちが伝わって、お腹の子どもは出てきたい時を選んで出てくるんだよ。」という助産師さんの言葉が印象的です。

楽しみにしている友人の田嶋かほるさんからの年賀状を今年も受け取ることが出来ました。そこには画面いっぱいに育みをもたらさう草花が描かれていました。そこには制限がなく、種類の違うもの同士が共存していました。嬉しさとともに、改めて自然体であることの大切さをその絵を見て感じました。

その反面、ワクチンを打つことやマスクをし続ける生活は自然から離れすぎていると感じます。そこに発生する意見の違いによる衝突と差別が私には悲しく思えます。田嶋さんの絵の中の草花のようなお互いを尊重しあうような傷のない世界になっていくことを望んでいます。初めての私の子の中にもその気持ちを大切にしてもらえると良いなと思った一枚の絵でした。

